訃　　報 ――謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

二ツ川健二　殿（建設部門）
平成21年11月3日ご逝去　64歳

■■■編　集　後　記■■■

今号は西暦2010年の新年号で、右も左もわからずに広報委員となってから何と20冊目の第120号。区切りの良い数字が揃ったので、なんだか意味もなくにやけています。ただ、コンサルタンツ北海道の印刷物原稿を校正する編集担当の順番が回って来るのは2～3年に1度だけ。このような長いブランクは前回の記憶をすっかり忘れさせてくれるには十分な時間なのです。おまけに見出しの体裁や写真の配置、ページ全体の見栄えなどを決めるデザインセンスが貧弱なため、いつも生気を失った状態で印刷原稿に向かい、周囲には近づきがたい負のオーラを放ちながら校正に追われています。

こんな頼りない第120号の編集担当ですが、原稿を読み進めるうちに〝やはり〟と思わせたのが、斉藤支部長の年頭所感や樋詰青技委員長の巻頭言で触れられている「政権交代」、「事業仕分け」をキーワードとする科学技術関連の予算縮小に関する話題です。蓮舫参院議員の「2位ではダメなの？」発言が衝撃的で世間の注目を集めましたが、これらの予算縮小は子供達の理科離れを加速させ、未来の科学技術の発展にブレーキをかけるような重要な問題だと危惧していました。

しかし、校正を進めて行くと、そんな憂鬱を晴らすかのような青年技術士交流委員会の「学校へ行こう！」という活動が目にとまり、「第29回地域産学官と技術士との合同セミナー」報告で書かれていた〝豊平川でのサケの自然産卵魚の多さ〟に驚かされ、「事業委員会主催・道南技術士会共催　技術研修会（宿泊コース）の報告」に書かれていた、箱館奉行所庁舎復旧工事の〝幕末歴史ロマン〟に癒されながら記事を読み進めていくうちに、いつのまにか初校の校正が終わっていました。

このように、全く頼りない編集担当に最低限の仕事をさせるのは、会員皆様方から寄せられる投稿記事や毎号悩みに悩む表紙写真です。巻末に「投稿のお願い」を掲載していますので、編集担当を〝癒せそう！〟という記事や〝これは！〟と思ったベストショットが撮れた方は気兼ねなく投稿して下さい。

編集委員会では、いつでも皆様の投稿をお待ちしております。

（第120号　編集担当　於本　嘉）